

德音祭共同研究報告

毎年、德音祭が近づくと十一月頃になると、三年生が急にバタバタ慌てて発表の準備にとりかかり、発表前日迄あつてもない、こうでもない意見百出。前夜祭のさわぎを横目でみながら、スッテインクだ、カッテインクだ、飾り付けだ、敵夜さわぎをしているのを見て、我々の時には、もつと早くから計画を立て夏休みをフルに利用して調査を……と最初の意気込みだけはよかったのだが、そんなファイトも、夏休みがくるとどこえやら……それでも休み前に一応研究テーマ、候補地だけは決めた、お密林へのアピールの意味も考えて、丁度六月頃ラジオ、新聞等で報道されていた利根川下流域の塩害地を中心に取上げ、塩害を通してこの辺一帯を地理的諸分野にわたって学習する事にした。夏休みは、二三人の有志の者が一度現地を下見に行つた程度で終つてしまった。九月十月は試験、巡検に追われて実際に調査その他の活動を開始したのは例年の様に十一月になってしまった。十一月の声を肉くとさすがにみんなあわせて、都庁、農林省等関係官庁を駆けずり回つて話を聞いた。データーを集め始めた。その向三回に亘つて、利根川下流域でも最も被害の大きかつた町村を茨城県から一つ、千葉県側から一つ選り、現地調査を行った。からっぽの米びつ、鶏の餌にしかならない籾米、さびついた脱穀機……を見せられ、被害が予想以上に大きかつたのにおどろいた。

次に研究内容を要約してみると、

塩害は普通、灌漑用水中の塩分濃度が0.3%をこえる場合に、稲の萎凋、生長停止、枯死といった形であられる。

(I)原因 ①自然的原因——降水量の減少と、暖冬異変による雪どけ水の流出により、海水の逆流のはげしい利根川の水を灌漑水として使用した事、

②人為的原因——利根川下流域のしゅんせつ工事、水稻栽培上の向題、利根川利水状況等が考えられる。

(II)被害状況

千葉県では香取郡南部、旭、入日市場附近で約6000戸、70.00町歩、茨城県では鹿島郡神栖村、行方郡潮来町が約600戸、17.00町歩である。灌漑用水を主に利根川及びその支流に求めている茨城県鹿島郡神栖村に例をとつてみると、今年は植付前3月頃から塩分濃度が濃くなり、6月には最高0.3%を示した。この辺では5月1日～10日が田植の最盛期であるが今年

は塩害の爲 灌漑用水の供給源がなく、農民はあらゆる応急対策を講じて96%程度植付を完了した。この辺一帯は早場米地帯であるが、神栖村では1200町歩中約460町歩が塩害に出合っている。被害を最少にいとめようとする農民村役場の懸命の努力の結果次の様な対策を講じた。

○ビニールパイプによる度河送水施設

○浅井戸施設

○追番作対策等

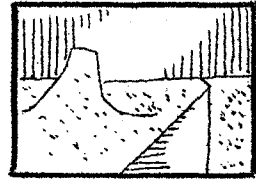
(Ⅲ)対策

応急対策——小貝川水路の掘さく、上流ダムの放流、上流の水利制限、ポンプ揚水。

恒久対策——常陸川下流の節切工事、現在不完全の水門の閉門化、本流の潮止工事、等があげられる。

(岡久美子)

巡 検 記



昇仙峡、身延、沼津

この巡検に行ったのも、やがて一年近くになるので、こまかいことは忘れてしまった。それで、今でも印象に残っていること、感想などを簡単に述べてみたいと思う。

私が地理科に送んだネーの条件は、地理科を巡検があるからだ、と云ってもよい。それくらい旅行を楽しみにしていた。又、巡検は地理の学習の一つだとは云っても多分に遊覧的になるのではないかと思っていた。幸か不幸かこの予想はいささかあてがはずれた。その様子を次にお知らせする。

これは赤木先生の地質学の巡検だ。最大の見学箇所は昇仙峡だけだ。途中地質学的、地形的に価値ある所は実地に見た。岩石はいろいろとあって憶えられなかったが、はつきりのみこんだことは、ストライク、ドイツ語がわかるものか。またそれらの測り方である。これらは教室では教わっていたものの、もうそれらが私の頭の中にどこにあるかあやしいものだった。又、断層も見た。なんだ、こんなのだったら度々見てたのになと思つて、今までの自分の学の黒さを取じた。

あの名からして天に昇るような昇仙峡、その岩も学術的には方状節理とい